令和4年度　学校経営計画・学校評価シート

高知県立高知若草特別支援学校（本校）

【高知県の教育の基本理念】	（1）学ぶ意欲にあふれ、心豊かでたくましく夢に向かって羽ばたく子どもたち （2）郷土への愛着と誇りを持ち、高い志を掲げ、日本や高知の未来を切り拓く人材	人材育成すべき姿	学校像：○児童生徒が自己実現を達成できる学校 ○保護者が成長と発達を実感できる教育を行う学校 ○地域になくてはならない存在として関われる学校 ○教職員が仕事に誇りをもち、やりがいを感じる学校
【取組の方向性】	《6つの基本方針》 ①チーム学校の推進 ②厳しい環境にある子どもへの支援や子どもの多様性に応じた教育の充実 ③デジタル社会に向けた教育の推進 ④地域との連携・協働 ⑤就学前教育の充実 ⑥生涯学び続ける環境づくりと安全・安心な教育基盤の確保 《6つの基本方針に関わる現新的な取組》 ①不登校への相応的な対応　②学校における働き方改革の推進	育成すべき資質・能力	児童生徒像：（知）自ら学ぶ （学ぶ楽しさを感じ、自ら進んで学習する意欲や態度を身につけた児童生徒 ②社会生活に必要な知識や技能、態度を身に着けた児童生徒 （徳）意欲、協調、協力 ③人や環境と積極的に関わり、自立し社会参加しようとする意欲を持った児童生徒 ①お互いを認め合い、思いやりの気持ちで協調、協力しようとする児童生徒 （体）健康、体力 ①卒業後も一人一人の持てる力を発揮し、将来にわたって豊かに生きるための、健康や体力、基本的生活習慣を身に着けた児童生徒
目指すべき姿の実現に向けた取組の概要	（1）学校教育目標、教育課程、日々の授業のつながりを意識したカリキュラムマネジメントサイクルの確立による児童生徒一人一人の実態に応じた教育課程の編成 （2）卒業後の自立と社会参加を見据えた教育の充実と豊かな心の育成 （3）教員の専門性の向上と指導力の育成 （4）児童生徒の命と人権を守る安心・安全な学校づくりの推進 （5）特別支援教育のセンターとしての支援機能や情報発信、保護者、関係機関等との連携による開かれた学校づくりの推進 （6）学校教育目標の達成をめざし、やりがい、働きがいのある学校組織の運営と働き方改革の促進		

（評価　A目標を下回る進捗　　B達成目標を達成　　C中間を下回る　　D改善を要する）

（重点取組項目）

項目	取組のねらい【P】	現状と目標【評価指標】（3校共通）	具体的な取組内容　【D】	中間評価　【C】	中間評価後の取組内容【P・D】	年度末評価　【C】	学校関係者評価	見直しのポイント　【A】
1　教育課程の改善	主体的、対話的で深い学びの視点での授業改善と学習評価を教育課程の改善につなげ、一人一人に応じた教育課程を編成する。【3年計画の3年目】	【現状・課題】 ○校と小学習指導要領に沿った3つの柱での目標設定や3観点の学習評価が定着しつつある。 ○全教員が単元計画案等の作成により単元を見通してつけたいカを教材、授業のねらいを明確にして評価方法や評価時期を意識した授業が増えてきている。 ○校で作成した、I・II類型の「目標内容詳細表」の作成を通して、単元計画案等の目標設定が明確になりつつある。II類型においては、教科会で指導内容や学習評価について検討できた教科もあった。 ○3校力リマネ及び校内力リマネで協議し事例収集を行った。 ■知1段階を目指す児童生徒の適切な目標及び評価規準の設定、その目標達成に向けた年間指導計画、単元計画案等の作成に悩んでいる教員がいる。 ■個別の指導計画を踏まえ、指導内容を十分に検討した年間指導計画の作成には至っていない。これまでの活動や単元ありきの計画となっている場合がある。（II類型） ■単元計画案等に主対深の視点を取り入れることや自立活動の配慮等がまだ十分ではない。 ■II類型においては、教科横断的な指導の検討と実践が必要である。 ■3校力リマネ等で収集した事例が作成のヒントとなり活用できる家庭には至っていない。 【目標】 ①教育課程の評価・改善を行うため、日々、単元計画案等を作成・活用した授業を実施するとともに、単元を通しての学習評価を年間指導計画の改善・充実に活かす。また、卒業後を見据えたキャリア教育にもつなげる。（2学期末80%以上青定的評価） ②単元の授業づくりのPDCAサイクルを徹底するとともに、指導と評価の一体化を理解するとともに、主対深の視点での授業改善を進める。（2学期末80%以上青定的評価） ③若草3校で教育課程実施上の課題を共有し改善のための検討を行う。	★①、②の目標を達成するための具体的な取組 【各様式の作成・説明会の実施】（教務） ○各様式（個別の教育支援計画、個別の指導計画、年間指導計画、単元計画案、教育課程改善シート、指導要録）を作成・活用するにあたり必要なガイダンスで説明会を設定する。 （校務支援システムを各教員が活用できるよう格行説明会を） ○学習指導要領の各教科の目標及び内容（重点化を含む）を踏まえた年間指導計画の作成を行い、単元後や学期末の学習評価を根拠に、各学期末には年計の修正を図ることについて説明する。 ○I、II類型は、学習評価を基に教育課程の振り返りができるよう「教育課程改善シート（改善案）」を2学期当初までに提案する。 ○年間指導計画の年間計画を作成、学習指導要領の目標・内容と生徒の特性に応じた各教科のシラバスや単元計画案の作成、観点別評価等を実施する。（主幹教務、教務、教科主任、地域支援担当） 【キャリア発達段階表の見直しの継続とキャリアパスポートの導入】（進路） ○社会性の発達を目指すための取組やR4年度版キャリア発達段階表（試案）と教科の関連についての検証する。 ○キャリア発達段階表は「4領域8能力」から「基礎的・汎用的能力」への見直しをする。 ○II類型は、キャリアパスポートを導入し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりできるようにする。 ★②の目標を達成するための具体的な取組 【単元計画案等を活用した公開授業及び研究協議の進め方・事例集（集録）の作成】 ○教科研の時間に単元計画案等を検討する。クラス、グループ、III類等の教員で分担して、全ての授業に単元計画案等がある状態にする。（クラス長、教科主任、各授業主指導者） ・原則、本校版単元計画案を使い、個別の手立て等書き足りない場合は枠を広げたり手書きで書き込むようにする。 ・III類型で指導書通りの場合は単元全てのコピーを使ってもよいが、主対深、自立活動の配慮、単元の目標及び評価規準と評価を追記する。 ○グループ別（知的1段階を目指すII知的1段階以上、III類型）公開授業、授業参観、研究協議をする。（研究） ・協議では「子供の学習評価と併せて、子供が資質能力を身に付けるための教師の主対深の手立て等、授業改善の協議を行う。 ・その際「単元計画案」及び「主対深シート」を活用する。 ○知的障害の教科指導の系統性の理解を促すための事例集（集録）を作成し、3校で共有する。（単元計画案とその分析、目標内容詳細表を掲載）（研究） ○「目標内容詳細表」を引き続き作成する。（研究） ・1段階を目指すグループは、R3年度に作成した簡潔版を見直しバージョンアップを図る。 ・1段階以上のグループは、生活、理科、社会、職家の「目標内容詳細表」（生活科等）を作成する。 ★③の目標を達成するための具体的な取組 ○3校力リマネでは年間計画を基に実施し、教育課程改善に向けて、教育課程実施上の課題を共有し、改善のための検討を引き続き行う。 ★①、②、③の目標を横断する具体的な取組 ○研修研究日（週1回、水曜日）の年間計画を作成し、研修研究を進める。 ◆環境教育について、学校の取組を整理するとともに、教員対象の研修会を実施する。	B	【成果】 ・各様式作成についての全体及び各学部別研修を行うことができた。（教務） ・II類型は現段階では、年間指導計画作成、教育課程改善シート、指導要録）を作成・活用するにあたり必要なガイダンスで説明会を設定する。 ・校内力リマネにて、「教育課程改善シート」改善の方向性を話し合うことができた。 ・「キャリア発達段階表」見直しについて、各学期主題及び3校キャリア推進チームと方向性を確認し、各校進路部主体で進めることができた。 ・単元計画案に基づき第2四半期の公開授業を行い、各校1回以上の公開授業及び研究協議を実施、授業改善に取り組むことができた。 ・3校力リマネにて、教育課程研究の取組み、成果と改善点について共有できた。 【課題】 ・キャリアパスポートの活用について、今後の方向性を検討する。 ・「目標内容詳細表」の改善、方向性について検討中である。	○教務部が中心となって、「教育課程改善シート」により振り返りの実践に応じた教育課程の改善と系統性をもった指導について検討する。 ○観点別評価等について点検、見直し、修正等を図る。 「キャリア発達段階表」の見直し案を作成し、来年度に向けて周知する。 ○全教科で単元計画案作成の実現を図る。 ○全第2回目の公開授業と研究協議を実施する。 ○3校力リマネにおいて、来年度の研修計画について各校でまとめ、共有を図る。 ○キャリアパスポート活用の来年度の方向性についてまとめる。 「目標内容詳細表」の改善点及び来年度の取組の方向性をまとめ、共有する。	【主な取組】 ①単元計画案等を作成・活用した授業の実施、単元を通しての学習評価を年間指導計画の改善・充実に活かす。卒業後を見据えたキャリア教育の推進。 ②単元の授業づくりのPDCAサイクルの徹底による指導と評価の一体化、主対深の視点での授業改善の推進。 ③若草3校での教育課程実施上の課題、改善のための検討。 【学校評価】 **＜数値＞** ・教育課程の改善につながる視点での授業づくり、学習評価について 【青定的評価88.7%】 ・単元計画案作成、目標設定、主体深の視点、観点別評価について 【青定的評価85.0%】 **＜結果＞** ・教科指導の実践について　【青定的評価97.6%】 ・学習のねらいや評価の説明について　【青定的評価97.6%】 【成果と課題】 ○各様式の作成について、全体及び学部別研修会を行った。単元計画案を初めて作成する教員もいたが、6月以降の公開授業の際には、全ての教員が単元計画案を作成して授業に臨めた。 ○全員、年間2回の公開授業を通して単元計画を作成し、授業改善に向けた研究を推進することができた。作成した単元計画案等を活用するなかで、評価改善を含む取組を実感できた教員も増えてきている。年度末に「実践事例集」を作成予定。 ○「教育課程改善シート」を見直すことで、学習内容や評価、年間計画についての理解を共有することができた。 ○連路部を中心に「キャリア発達段階表」を完成させることができた。 ■単元計画案の作成について、内容等に個人差があられる。PDCAサイクルの取組徹底と負担感を減らすよう様式の見直し、全ての教員が単元計画案を作成して授業に臨めた。 ○全員、年間2回の公開授業を通して単元計画を作成し、授業改善に向けた研究を推進することができた。作成した単元計画案等を活用するなかで、評価改善を含む取組を実感できた教員も増えてきている。年度末に「実践事例集」を作成予定。 ○「教育課程改善シート」を見直すことで、学習内容や評価、年間計画についての理解を共有することができた。 ○連路部を中心に「キャリア発達段階表」を完成させることができた。 ■単元計画案の作成について、内容等に個人差があられる。PDCAサイクルの取組徹底と負担感を減らすよう様式の見直し、全ての教員が単元計画案を作成して授業に臨めた。 ○全員、年間2回の公開授業を通して単元計画を作成し、授業改善に向けた研究を推進することができた。作成した単元計画案等を活用するなかで、評価改善を含む取組を実感できた教員も増えてきている。年度末に「実践事例集」を作成予定。 ○「教育課程改善シート」を見直すことで、学習内容や評価、年間計画についての理解を共有することができた。 ○連路部を中心に「キャリア発達段階表」を完成させることができた。 ■2段階に向かう児童生徒のための「目標内容詳細表」の継続した研究が必要である。 ■3校力リマネの実践に向けて、共有課題の洗い出しを行い、各校の特色や3校で共通して取り組むテーマを絞り、焦点化して協議を深められるようにする。 ■環境教育についての校内研修会は実施できなかったが、主幹教諭を教育センターの研修会に派遣し、現在の取組を見直し、学期や学級等で実践の意味付けを行い、推進できるようにした。	B+	・アンケート結果を見るとだいたいプラス評価（青定的な意見）が多数に多い（よって、学校は「児童・生徒後援者から概ね評価されている」と思う。学校の自己評価は妥当である。 ・2段にとってわかる授業を実施してほしい、保護者の聞いも同様だと考える。アンケート結果をみれば、90%を超えるプラス評価はとても高い。 （保護者として）授業を見学したときに学校はとても工夫に本立てをされていると思いている。	○単元計画案の様式の見直しと継案作成教員の焦点化により、質の向上と効率化を図る。 ○「目標内容詳細表」指針ラームにさる継続した研究と活用を目指す。 ①「キャリア発達段階表」の効果的な活用を目指す。 ③3校力リマネにおいて、学校経営計画に沿った共有課題に取り組む。
2　専門性の向上	教科学習を後方支援する自立活動の指導の充実を図る。	【現状・課題】 ○複数教員で作成する流れ図等研修により、児童生徒への支援の共通認識が進み、指導や支援に活かすことができた。また、目標が焦点化されたことで「時間の指導」の指導内容を明確にした指導が増えてきた。 ○教科の後方支援としての自立活動という捉えを理解して取り組む教員が増えている。 ■「時間の指導」と教科等における「配慮事項」「合理的配慮」があいまいで整理できていない場合がある。 ■流れ図を作成し、指導目標・内容が自立活動のPDCAにとどまることなく、学習上の困難を後者・充実につながる必要がある。 ■卒業後を見据えた指導について共通理解が必要である。 【目標】 ①流れ図等の作成または見直しを通して、教科学習を後方支援する自立活動の配慮について理解を深め、自立活動の指導を見直す（教育課程の改善につなげる）。（2学期末80%以上青定的評価） ②肢体不自由教育における専門性の維持向上。 ③ロナ禍でもできる方法を検討し、食事指導、身体の動きの研修を実施し、専門性の維持向上に役立てる。	★①の目標を達成するための具体的な取組 【流れ図研修会等の実施】（自立） ○流れ図等研修の中で、作成のねらいや評価の視点について取りあげる。また、自立活動に関する基礎的な理解を進め、研修を実施する。 【教科学習を後方支援する自立活動の配慮】（自立） ○流れ図の指導場面で設定した教科との関係を単元計画案と関連付けて取組する。 ○自立活動の配慮と合理的配慮との違いを明確にし、単元計画案の事例を基に説明する。 ○公開授業・研究協議の際には、単元計画案等の自立活動の配慮についても話し合う。 【自立活動の指導の観点が教育課程の改善につながることを検証できるように「教育課程改善シート」の自立活動の振り返り項目を検討する。（自立 教務） 【流れ図活用したケース会を踏まえた授業改善の実践事例の研究。（自立） →【国立特別支援教育総合研究所の研究協力機関として共同研究の実施（令和3年～4年）】 ※流れ図の作成・評価のサイクルが、個別の指導計画と同様にすることが可能かどうか検討する。過切な指導目標、内容設定や教職員の共通理解は維持しつつメリット・デメリット、他の書類との関連、流れ図研の進め方等総合的に考える。（自立） **★②の目標を達成するための具体的な取組** ○食の指導を食事指導などと合同研修会を活用し、肢体不自由教育の専門性の維持向上研修を学級、学部、全ともう引き続き実施していく。 ○リモート開催となった場合の効果的な研修の工夫。情報ICT部と相談しながら実施方法を検討する。（自立ICT）	B	【成果】 ・流れ図研修において、作成のねらいや評価の視点について共有できた。 ・自立活動に関する基礎的な理解を進めるための自立研修を定期的に実施できた。 ・自立活動の配慮と合理的配慮との違いを明確にするための研修や勉強会を実施できた。 ○公開授業・研究協議において単元計画案等の自立活動の配慮について話し合うことができた。 【課題】 ・自立活動と教科との関連について、全体の理解が不十分である。 ・「教育課程改善シート」の自立活動振り返り項目について、教務部等と共に引き続き検討し、来年度の方向性を共有する。	○引き続き、流れ図を活用したケース会を踏まえた授業改善の実践事例の研究を行う。（自立） ○自立活動と教科との関連を単元計画案の中で明確に示すことができるようにする。 ○「教育課程改善シート」の自立活動振り返り項目について、教務部等と共に引き続き検討し、来年度の方向性を共有する。	【主な取組】 ①流れ図等の作成または見直しを通した自立活動の配慮と指導についての理解と見直しの推進 ②肢体不自由教育における専門性の維持向上 【学校評価】 **＜数値＞** ・教科学習を後方支援する自立活動の指導内容を見直した指導について 【青定的評価86.2%】 **＜結果＞** ・自立活動の目標や指導内容について　【青定的評価93.0%】 【成果と課題】 ○流れ図作成と見直しが定着していくことで、自立活動の指導に対する理解が進んできた。 ○自主研修等を通して専門性を高めようとする意識が高まっている。 ■教科学習での自立活動の配慮の仕方、また合理的配慮との区別について、継続した研修が必要である。 ■各自の経験や現解に応じて一人一人が更に研鑽していくために、自主研修会を継続していく必要がある。	B+	・流れ図を作って目標を明確にしたことは、子供にとっても安心感の。学習・生徒・保護者・教職員間に信頼関係がある証拠であると考える。	○新しいサイクルに沿った流れ図研修を通して、教科と関連させた指導の充実を図る。
2　②ICT活用の推進	児童生徒の目標達成のための手立てとしてICT機器（Chromebook,iPad,VOCA等）の利活用を推進する。	【現状・課題】 ○研修や会議、授業で積極的に利用する教員が増えたことで基本的操作方法についての理解が進んだ。 ○GSASスクールサポーターICT支援員のサポートを活用している。 ○児童生徒の機器活用に授業で取り組んだことで、生徒がジャムボードドキュメントとホームスライドクラスルーム等を活用できたところもある。Chromebookを持ち帰っての宿題等に活用を始めた。 ○防災ではICT等を推進した。 ○一人一台端末の活用のための手続きやマニュアルは一定整えることができている。 ■教員クラスにより差がある。活用することが目的となってしまわないように、児童生徒の目標達成のための手立てとして、実態に応じたICT機器の活用ができるように、したい。 ■家庭持ち帰りの取組を進める計画であるが、家庭の状況により宿題や持ち帰りが難しいことが予想される。 ■障害の重い児童生徒に対する活用方法で悩んでいる。 【目標】 ①全ての教員が児童生徒の実態に応じたICT機器（Chromebook,iPad,VOCA等）を授業の中で利活用できるようになる。（2学期末100%青定的評価） ②全ての教員がGoogle Workspace for Educationを校務で利活用できるようになる。（2学期末80%青定的評価） （参考）第3期高知県教育振興基本計画改定版（令和4年度重点特別支援学校目標）高知県教育委員会 ◆児童生徒の個別の指導計画等へのICT活用率の明記　100% ◆全ての教員が授業においてICTを活用（毎日）　100% ◆小・中学級の児童生徒がICTを活用（1日1回以上）　100% ◆高等部の生徒がICTを活用（1日1回以上）　80%【現状・課題】	★①の目標を達成するための具体的な取組 ○1人1台端末はChromebookに設定するのではなく児童生徒の実態に応じたICT機器を活用する。児童生徒の実態を踏まえた「個別の指導計画」の作成。 ○1台ずつGoogleクラスルームを活用して実践事例を蓄積したりICT支援員の助言による教員を育てる。（情報ICT） ○実施把握、目標設定、ICT機器活用」がセットで考えられるように個別の指導計画に活用の目的を明記し、公開授業ではICT機器を活用する。（情報ICT 教務 研究） ○寄宿舎や家庭で宿題等で活用することを推進する。（情報ICT クラス長 主幹会 教科 教務） ○家庭と連携してGoogleクラスルーム利用が可能なクラスは、通常や夕級通信の電子化を試行する。（情報ICT クラス長 主事） ★②の目標を達成するための具体的な取組 【ICTを活用した自立活動の効果的な在り方の調査研究（文部科学省指定校）令和3年～4年】 ○令和4年度は令和3年度の実践で得られた知見を基に、さらに支援する学校を拡充。今後の特別支援学校の効果的な学校支援の進め方の試案をまとめ、県内外に発信する。（相談支援、自立、主事、クラス長） ★②の目標を達成するための具体的な取組 ○教員がGoogle Workspace for Educationを校務で利活用できるよう全員参加の研修を行う。（情報ICT） ○1台の研修や会議で、Google Workspace for Educationを活用する。（情報ICT、各部長、主事等）	B	【成果】 ・Google Workspace for Educationを校務で利活用できるよう全員参加の研修を行うとともに、児童生徒の実態を踏まえた3グループ別事例紹介を行う等効果的な研修をエ夫できた。（情報ICT） ○GSASスクールサポーターICT支援員の協力による情報共有及び児童生徒の実態に応じたアプリ作成を推進できた。 ・日々の授業におけるICT機器の活用を推進できた。 【課題】 ・家庭と連携してGoogleクラスルーム利用が可能なクラスは、通常や夕級通信の電子化を試行中。 ・寄宿舎や家庭で宿題等で活用することを推進中である。	○引き続き年間の目標達成に向けて各期を推進していく。	【主な取組】 ①全ての教員が児童生徒の実態に応じたICT機器の利活用ができる ②全ての教員がGoogle Workspace for Educationを校務で利活用できる 【学校評価】 **＜数値＞** ・Google Works for Educationの知識技能の習得について 【青定的評価68.7%】 **＜結果＞** ・ICTを活用した授業づくりについて　【青定的評価77.5%】 **＜結果＞** ・スイッチやiPad、パソコンなどのICTを活用した授業づくの実践について 【青定的評価76.7%】 【成果と課題】 ○実態に応じたICT教材の活用が増えた。 ○昨年度のICT支援員との協力体制が構築されてきた。 ○Google Workspace for Educationを校務で活用できる教員が増えた。 ■実夜の児童生徒に効果的なICT教材の研究が必要である。 ■十分利活用できていない教員もおり、それぞれの段階に応じて研修を継続していく必要がある。	B	・ICTの知識技能を習得しているとはいえ、実践は初期段階であり、ICT支援員と協力し、児童生徒の実態に応じた教材研究を行う。 ○ICT支援員と協力し、児童生徒の要望生徒たちのための教材研究を行う。 ○ICT支援員と協力し、研修を継続していく。	○充実ICT利活用に向けて、それぞれの現解段階に応じた効果的な研修を行う。 ○ICT支援員と協力し、児童生徒の実態に応じた教材研究を行う。 ○児童の要望生徒たちのための教材研究を行う。 ○ICT支援員と協力し、研修を継続していく。 ○ICT支援員と協力し、研修を継続していく。
働き方改革	子どもに向き合う時間を分け合う高める時間の確保と一人一人の力がさらに発揮づくり生行う。	【現状・課題】 ○定時時間や教材研究日の確保はかなり進んだ。 ○一人一人が役割分担が意識され、学期・学級、分掌の長を中心とした経営力が高まってきている。 ○3校協働により実務の負担軽減につながった。 ■業務の平準化、見える化が必要。 ■諸設的に話しやすい、他者の立場で発言を考えたり、気持ちよく仕事ができるように、教職員間の相互理解、声掛け、助け合いなどをさらにしていく。 【目標】 ①教職員一人一人がワークライフバランスを意識した働き方を実践し、空き時間や教材研究時間の確保とともに、業務の平準化を進める。（2学期末80%以上青定的評価） ②チームワークの良い教職員集団づくりをするとともに、働きやすく安心・安全な職場環境を実現する。（2学期末80%以上青定的評価） ③本校・分校が協働し、各校の教育活動の交流による質の向上と業務の効率化を図る。	**★①の目標を達成するための具体的な取組** ○時与時間配属、教材研究時間確保の工夫を続ける。（教務、主事） ・マイナス人員でできる授業の検討。・学習支援員ICT支援員の活用　・支援員による給食準備、片付け、清掃作業等 ○毎々の教職員のクラス、学級、分掌等の担当業務一覧を作成することにより見える化を図り、少しずつ意識が高まってきた。 ・子育てシートに個内業務担当者を明記し、個々が業務の進捗状況シートに記載し、部会で確認する。（教務） ○主事会とクラス長会を実施し、教育課程実施上の課題や働き方に関する課題解決の協議を行った。主事、学級主任（クラス長） ○毎週ケの意識改革を継続して進めるために、月1回程度及び長期休業期間は一斉集ずイレ、定時退刻する。 ○II類型では、単元テストで評価が可能な教科は期末テストを実施しない。期末テストが必要な教科は、教務が定める期間内に各教科の時間の中で実施し、テスト時間割は組まない。（教務、主任会、教科主任） ○働き方に関する情報管理、防災の観点から、職員室の机上の整理整頓と維持は基本ルールに沿って行う。 →机上に置くものはパソコン2台とかご1個分の最低限必要な書類のみ。文房具やファイル等は引出しなどなどへ入れる。→推進ずイレ机の整理日とする。（主事） ○時間外文書に対する勤務として「授す時間の短縮のために共有フォルダの整理ルールを定め、ルールに沿って全員が活用する。 →情報ICT部が「学期当初に定め、長期休業中にチェックする。（情報ICT、分掌部長、主事、クラス長等） **★②の目標を達成するための具体的な取組** ○チームワークの良い教職員集団づくりのための研修とチェック、評価（改善に取り組む）（人権教育主任、主事、寮務主任、クラス長） **★③の目標を達成するための具体的な取組** ○若草3校でボッチャ交流会（体育科）や合宿交流会（寮所科）、通路指導（通路指導主事）ICT推進（ICT部）、相談業務（相談支援室）等に役割分担や協働しながら取り組む。（各担当） →情報ICT部が「学期当初に定め、長期休業中にチェックする。（情報ICT、分掌部長、主事、クラス長）	C	【成果】 ・子育て支援ICT支援員のサポートで授業づくりゆとりができた。 ・担当業務毎に、各学級、分掌等の担当業務一覧を作成することにより見える化を図り、少しずつ意識が高まってきた。 ・子育てシートに個内業務担当者を明記し、個々が業務の進捗状況シートに記載し、部会で確認できた。 ・単元テストで評価が可能な教科は期末テストを実施していない。 ・月1回の一斉集ずイレを実施することができた。 【課題】 ・クラスによって、マイナス人員でできる授業検討については各役割分担の平準化が未だ残しい。 ・主事会とクラス長会を実施したが、教育課程実施上の課題や働き方に関する課題解決の協議については深く話し合えていない。 ・職員室の机上の整理整頓の意識が定着しつつあるが、個々への声掛けは必要である。 ・共有フォルダの整理ルールが未だ不十分である。 ・特に夜間各初の研修日程が詰まり、クラス業務に困難をきたした。	○マイナス人員でできる授業検証を推進する。（教務、研究、管理職） ○各クラスや分掌部の役割分担の平準化に向けて、来年度に向けて振り替えり、必要な改善を行う。 ○主事会やクラス長会、学部会において、働き方に関する課題解決に向けて、具体案をまとめる。 ○職員室の机上の整理整頓の意識を高めるために声掛けを日常的に行う。 ○情報ICT部を中心に情報共有フォルダの整理ルールを構立する。 ○来年度に向けて、研修体制を改善する。（研修日程、職員室ケーク資料の活用等を検討する）	【主な取組】 ①教材研究時間の確保と業務の平準化の推進 ②役割分担の平準化、クラス長を中心に、役割分担の意識が高まってきた。 ③本校・分校の教育活動の交流による質の向上と業務の効率化。 【学校評価】 **＜数値＞** ・教材研究の時間確保について　【青定的評価65.0%】 【成果と課題】 ○タイムマネジメントの意識が高まり、自己目標を達成した教員が増えてきている。 ○分掌部長や主事、クラス長を中心に、役割分担の意識が高まってきた。 ○チームとして役割、その中での一人一人の役割についての意識が高まり、クラスでの話し合いを重視するようになってきた。 ○同じポッチャや合同作品展の開催により、質の向上と業務の効率化が図れた。 ■合議や委部研修は実施は減ったものの、それを実感できない教員がいる。 ■時にが多部において、業務の平準化にまだ戸惑いがみられる。 ■業務の多さ、個別対応課題がある。 ■教員間のコミュニケーション、連携が不十分なことがある。	B	・昨年度に比べて青定的評価が減ったのは残念である。ゼひ、青定的評価が減少したことについて丁寧に分析して欲しい。 ・働き方改革に関して改善の手立てについては出尽くした感が否めない。新たな時間の長短ではなく、達成感など質の問題へシフトチェンジしていらように感じる。	○充例職員会の回数を減らし、クラスで話し合う時間を増やす。 ○若手研修を見直す。 ○既存の書類を見直す。 ○タイムマネジメントの意識とともに、教員としての使命について、日常的に開始する方法を検討する。 ○各分掌の業務について見直し、役割の平準化を図る。 ○フォルダの整理担当を決める。